様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２４年　５月２９日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：新学術領域研究（研究課題提案型）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１２０００２４
研究課題名（和文）ＩＴＡＣＯによる新しい地誌学の創生と地域の人縁生成に関する試行研究

研究課題名（英文）Towards a New Regional Geography and Social Inclusion: A Feasibility Study for Community Organizations through the ITACO Systems

研究代表者
若松　司（WAKAMATSU TSUKASA）
大阪市立大学・都市研究プラザ・研究員
研究者番号：１０５１４８８８

研究成果の概要（和文）：国内外の大都市から限界集落に至るまで、条件不利や社会的排除を蒙りやすい人々に対象を絞り、現場に根ざしたフィールドワークを実践した。埋め込まれて語られないような、意味づけられることのない地理的情報を徹底的に掘り起こし記述することで、地域の系譜や記憶を抽出する実験的な試みを多面的に展開した。今後の地域のあるべき将来像や短期的な施策の展開に、地誌という形で地理学的に貢献できることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：We have carried out a lot of field works, adopting as our research field areas where socially disadvantaged people are concentrated both in metropolitan areas and in marginal villages. In particular, we have engaged in the practical efforts to recall forth the power of the places, the genealogy of such areas and place-based memories, together with the residents, through digging up the geographical information thoroughly which have rarely been paid much attention. As a result, it is confirmed that the compilation of various local histories and knowledge, or new regional geography, can practically contribute to the re-creation of social organization and the community revitalization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	8,400,000	2,520,000	10,920,000
2010 年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
2011 年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
年度			
年度			
総　計	23,800,000	7,140,000	30,940,000

研究分野：人文学、総合領域
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学、科学教育･教育工学・教育工学
キーワード：新しい地誌学、教育、ゲニウス・ロキ、「見える化」、マイノリティ、社会的包摂、在日コリアン、同和地区

１．研究開始当初の背景

(1)研究の背景

現在、公的セクターが縮小傾向にある中で、「地域」というフレームワークや地域ガバナンスへの関心がますます高まっている。しかし、多くの地域は21世紀のあるべき自画像を見失って疲弊し、過去の経緯から生じてきた排除に加え、現代の新たな社会的不利層の排除にも直面している。本研究では、旧来のマイノリティ集住地区に焦点を当てつつ、こうした新たな不利層も含めた「地域」での社会的包摂の実践可能性に焦点を当てる。

(2)マイノリティをめぐる状況

被差別部落やエスニックコミュニティ、日雇労働者の集住する寄せ場は社会問題がいち早く顕在化する代表的な場所（place）である。こうした場所には地域を基盤にした中間組織やNGOが存在し、地域住民の生活・労働の再生産に大いに貢献してきた。しかし、日本の社会運動を牽引してきたこれらの組織も現代においては制度疲労を起こし、集住を基盤とする組織ばかりか地域そのものの解体が現実化するようになってきた。

一方でニート、非正規雇用労働者、ホームレス、刑余者など新しい格差社会の到来を象徴する社会階層が注目を集め、また絶対的貧困や下層社会が再び前景化している現状に対し、社会保障政策のみならず、学校も含めた地域のセイフティ・ネットも機能不全に陥るという危機的な状況が露わになっている。

こうした状況下では、制度・施設等の地域資源の整備だけでは十分とはいえない。重要なのは、そのような資源を運用していく人びとの地域への愛着を持続可能なかたちで組織化することだと考えるに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、マイノリティの集住する社会的条件不利地域を対象に、場所に基づく互酬的関係の復活を通じて新たな地域の担い手を育成するための、広義の教育システムを立ち上げることである。このシステムを、本研究ではITACO（Interactive Tradition Authoring system for Community Organization、人縁生成のための対話支援型「口承」・「地霊」創作システム）と呼ぶ。

建築学や場所論では、住民の場所への愛着を意味する「ゲニウス・ロキ」＝「地霊」という述語が存在する。それは「生活・活動の場を共有する」という住民相互の関係がその地に堆積し、澱のように漂う雰囲気として知覚され、街の情緒にまで醸成される何ものかである。「地霊」と称される雰囲気や情緒は実証不可能であるが、しかしこれこそが地縁に基づく人的ネットワークの魂なのである。

本研究では、この「ゲニウス＝ロキ」を地縁創生のための、そして地域ガバナンス再定義のための要諦と位置づけ、その湧出を通じて新たな人縁生成を目指すことを目的とする。その際、以下に示すように、二つの観点の「見える化」(visualaization)に着目する。

第一の「見える化」は、地域住民の場所の記憶をよみがえらせ、それらの物語が錯綜する場を「演出」することを意味する。いわば「ゲニウス・ロキの召喚」である。最初の段階の「演出」では、研究者が地域住民に働きかけるという形式を採用するが、こうした場を繰り返していくことで、やがて住民がイニシアティヴを採るようになり、自らの手で地域の姿を「演出＝表現」し、さまざまな問題に取り組んでいく担い手として育っていくことが目指される。

第二の「見える化」は、召喚されたゲニウス・ロキをさまざまな形で「定着」、ドキュメント化していくことを意味する。それは「演出」に必要なさまざまな資料を収集・蓄積しツールを開発していく工程である。最終的には地誌の編纂が目指されるが、この作業に地域住民が参加することを想定している。そうすることで住民自身の場所の感覚が文書のなかに定着していくものと考えられる。

以上に示す「見える化」のプロセスは、地誌を基軸としながら大学と地域との往還的関係を促進し、新たな学びの形＝「新しい地誌学」の創出につながると想定される。

３．研究の方法

ゲニウス・ロキの召還に際して依拠するITACOシステムとは、具体的には、地理情報システム(GIS)を大胆に改変して地域に貢献する人材育成を目指す教育システムを指す。

ITACOシステムの構築・運用による教育の実践は、以下の四つのフェーズから成る。

【PHASEⅠ】地域のかたちの「見える化」

受け身の状態の住民に対し、統計資料や地域資料の収集および社会地図化、展示イベント、視察コーディネートを通して、地域住民の気付き、興味関心の促進を図る。

【PHASEⅡ】自分史・生活史の見える化

生活史の聞き取りやワークショップを通して研究者と住民との対話を促進し、人的ネットワークの構築へとつなげる。

【PHASEⅢ】地域史の見える化＝地誌の編纂

研究者の役割は、アドバイスと側方支援へと徐々にシフトし、地域住民による地図製作・主体的な学びにも重点を置く。地域巡検や地図化、ドキュメントの作成によって地域へのアクションを強めていく。

【PHASEⅣ】地域問題・ニーズの見える化

研究者と地域住民とが、対等な関係の下で多方面におよぶ地域支援計画の策定および事業実施に従事するとともに、地域を学ぶための教科書づくりに取り組む。

４．研究成果

(1)地図を用いた新たな社会関係構築の実践

①地域アイデンティティ湧出に向けた試み（大阪市西成区・釜ヶ崎）

日本で最大規模の日雇い労働者集住地区である釜ヶ崎では、多くの支援団体がヨコの関係性を持って活動を展開してきたが、近年は社会的排除の不可視化も進んできた。この事例では、地誌編纂として『釜ヶ崎のススメ』（〔図書〕の①）の刊行、および、子どもを対象とした地図作成ワークショップの実践という成果を得た。

前者について、釜ヶ崎は市民社会から差別や偏見でまなざされ、否定的なイメージが強い中、近年の大きな変容は正確には伝えられてこなかった。このような釜ヶ崎と市民社会との壁を乗り越えるために、『釜ヶ崎のススメ』を刊行し、市民社会への釜ヶ崎の歴史や現状の伝達、およびそれらが「見える化」しうる媒体づくりに取り組んだ。執筆者には多様な分野の研究者が参集したほか、支援者やアーティストといった現場の多彩な実践者も加わり、わかりやすくかつ研究水準の高い入門書の作成に取り組んだ。このような経緯から、本書は多様な読者に開かれた書物へと育てられたといえ、このことによって、多様な立場から釜ヶ崎という土地の地霊を呼び起こすことに成功した。なお、本書第7章「騒乱のまち、釜ヶ崎」(原口剛)は、『人文地理』誌に掲載された(〔雑誌論文〕の④)。

後者については、2003年設立のアートNPO「こえとことばとこころの部屋(ココルーム)」と協働で、地域の子どもたちが地域史を理解し、アイデンティティを育むワークショップを開催した。これらのワークショップを経て、子どもたちが地域の未来・現在・過去を一枚のおおきな布に自由に描くという「あしたの地図」と題されたワークショップが開催された。そうして、想像的であり現実的でもあるような不可思議な地図が、子どもたちによって生み出された。

このような実践がもつ地理学的意義として、以下が挙げられる。第一に、それは語りや表現を通じて地霊を召喚し、それとともに地域の内と外を隔てる壁を乗り越える取り組みであるといえる。第二にそれは、研究者がアーティストや地域住民との協働によって地図を生み出すという、新しい学知の在り方を示している。第三に、子どもたちが描き出した想像的かつ現実的な地図は、アートとしての表現的価値をもつとともに、それを描く行為によってアイデンティティを育むような教育的価値をも有している。従ってこの取り組みは、アートや文化を通じた社会包摂の実践として大きな意義を持つといえる。

②社会地図による地域問題の「見える化」(大阪市生野区、在日朝鮮人集住地区)

日本のエスニック集団集住地区は、いわゆるセグリゲーションではなく、マジョリティと混住しながら日常的に接触を多く持っているところにも特徴がある。しかし、それぞれの集団が閉じたものと捉えられ、(無意識的な)集団間の関係の存在は看過されがちであった。そこで、社会地図を用いて地域問題を可視化してさまざまな場面でそれらを展示し、(マイノリティーマジョリティ関係を含む)地域への関心を高める試みを行った。

住民イベントでの地図の展示のほか、最も顕著な成果としては、大阪府立桃谷高校定時制部と協働で行ったシンポジウム「写真と文化でつなぐ『共生』の街・猪飼野からの発信」が挙げられる。ここでは、写真家による写真展示と地図を組み合わせ、また、住民より提供された史資料を展示することで、この地域に蓄積されてきた社会関係の蓄積を「見える化」することに取り組んだ。来場者の反応からは、地図が地域への関心を大いに高めるツールになりうること、および、写真や史料と組み合わされることで「見える化」の効果がより高まることが確認された。

(2)宗教を基軸とした実践

①阿倍野Religion-Cafe

大阪市立大学・都市研究プラザの阿倍野現場プラザを拠点に、2009年8月から月一回のペースで、「阿倍野Religion-Cafe」と銘打った人縁生成のための取り組みを進めた。第一線で活躍する宗教者・宗教研究者を招き、実践を通じて読み解いてきた日本社会の有り様を説得力のある語りで聴衆に伝え、また、聴衆の側も臨場感を持って何かしらの「学び」を得る機会をカフェというカジュアルな形態で実践してきた。言うなれば、話し手、聞き手が互いに繋がりあえる場であり、Religion-Cafeの特徴の一つといえる。

会場となっている「阿倍野長屋」の空間は、こうした相互の関係を作り出す上で、重要な役割を果たしている。参加者の「まるで実家に帰って来たようだ」、「祖母の家に遊びに来たよう」といった話からは、会議室のような無機質で均質な空間ではなく、生活感や懐かしさを感じる「長屋」の空間であるからこそ生まれる感覚があることが伺える。さらには、話し手と聞き手が、互いの垣根を越えて、心から伝えたいこと、聞きたいことを通わすことのできる場になっている。このように、20回を迎えたReligion-Cafeは、話し手、聞き手の枠を越え、互いに気づきをもたらす「学びの場」へと深化している。

②「祈りの場」を通じたゲニウス・ロキの召還

2009年以来、「桜ノ宮「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト(通称:龍王宮プロジェクト)」を実施している。「龍王宮」とは、大阪環状線桜ノ宮駅からすぐの大川沿い河川敷に存在し、済州島の巫俗伝統に由来するシャーマニズム「クッ」が行われる場所であり、特に済州島出身女性にとっての心の拠り所であったとも言われている。2010年は「もう一つの水都大阪」と題し、龍王宮の歴史をその場所とともに体感するイベントを開催し、報告書にまとめた(〔その他〕の③)。2011年3月には、「龍王宮」のルーツを辿ることを念頭に、韓国・済州島を訪問し、毎年旧暦2月に済州島各地で行われるヨンドゥングッ

を調査した。今回の調査を踏まえることで、「龍王宮」という場所の意味を深く理解するきっかけになったとともに「龍王宮プロジェクト」の今後の課題が明確になった。

(3)エスニックマイノリティ集住地区における地誌編纂

①広島市における在日朝鮮人バラック街の記憶

1960年代、かつて存在した在日朝鮮人が多住するバラックが河川改修に伴い撤去された。その過程は、都市環境整備に名を借りたマイノリティの排除であるとともに、そうした存在が一時的に「可視化」される契機でもあった。バラックの景観が完全に失われた中、その現代的な意義を問う上で史資料と地図による「見える化」は有効な手段となりうる。

そこで、地元の研究者や支援団体関係者とともに、当時の新聞記事を蒐集し、データベース化した上で報告書として刊行した（〔その他〕の⑥）。また、立ち退き経験者へのインタビュー調査なども併せ、撤去に関する断片的な記憶・記録を地誌として編纂し、場所の記憶を総体として蘇らせることに努めた。

②神戸市長田区での「共在」プロジェクト

本プロジェクトは、神戸長田という地域を多様な文化背景を有する人びとが「共在」する空間として位置づけ、同地をめぐる人びとの記憶を学際的方法（地理学、社会学、文化人類学、教育学、都市史）によって記録化し、考えていくことを目的としている。ここでの地誌編纂の具体的な成果としては、報告書の刊行（〔その他〕の②）が挙げられる。

神戸長田は阪神・淡路大震災を契機として多文化共生社会の萌芽が生まれたと言われている。しかしながら、実際の「多文化」を担う人びとの目線からみた地域観が、総合的かつ統合的に議論されてきたとは言い難い。これに対し本報告書では、震災被災者と復興再開発／在日朝鮮人／奄美系住民／ベトナム系住民／NPO活動とベトナム系のこどもたちという、多様な人々が交差する空間／場所となった長田の多様性をめぐる「記憶」を、いわば「層」として「記録」し、考え始めていくための土台構築を目指した。また、本書は様々な「共在」状況に目を向け、時には利害が対立する者同士での意見表面を目指すものでもあり、さらにそのことを通じ、不可知であった人々（他者）との出会い直しを創発的に生み出すことも企図されている。

今後、地理学をはじめとした学際的な研究者ならびに市民活動実践者の共同作業から同地のフィールド調査を継続し、同地をめぐる「共在誌」を描くとともに、変容しつつも存続する多文化社会の根本条件の解明を目指す。なお、本報告書作成に関連して、共同報告（〔学会発表〕の③）も実施した。

③東大阪市での社会運動のデータベース化

東大阪市は、在日朝鮮人の集住地区であるとともに、労働運動の盛んな地域でもあり、これら二つのトピックが交錯するところでさまざまな社会運動が展開されてきた。

この運動で中心的な役割を果たした故・合田悟牧師が残した運動資料のファイルおよそ1、000冊について、運動関係者とともに今後の活用を意識したデータベース化に取り組んだ。この作業では、個別の運動の重層的な関係性が明らかになり、地域課題への住民の取り組みの蓄積が「見える化」された。なお、その一部は、関係者自身の手による『共生への思い－合田悟牧師　東大阪・草の根40年の歩み』(2011年）として刊行された。

ただし、その一方で、今後の活動継続に関する課題も浮き彫りになった。すなわち、関係者が既存の運動団体をベースとしながらも個人の思いをベースに活動してきたために、差別や地域問題が潜在化する現在の状況下では、新規の参加者を得にくいという問題である。今後、データベースの活用について、更なる検討の余地を残した（〔論文〕の①）。

(3)地域での学びの場を通じた支援ネットワークの再構築

本ネットワークは、元ホームレスを中心にした地域内における居場所の形成と、その場を通じた副次的な支援ネットワークの構築を行う「楽塾」の取り組みから、社会的包摂のあり方を問うことを目的とする。

楽塾では、大阪府大阪市西成区に拠点を置き、元ホームレスやニートと呼ばれる社会的に排除され、また困窮してきた人たちを対象に、地域生活のレベルアップや、就労・ボランティアなどの社会生活のスキルアップを目指している。ワークショップ形式の学習会を毎週開催し、コミュニケーションを積み重ねている。メンバーは、30代から80代と幅広く分布し、男女比は8:2ほど、現在は生活保護や、そこからステップアップして就労訓練中の人などが主である。

例えばホームレスと言えば、男性が圧倒的に多く、地域生活におけるコミュニティとは大きく異なる。しかし、この学び直しの場では、女性のメンバーもおり、また世代も幅広く参加していることで、地域生活に慣れる場として機能している。また、毎回の講師には、専門家以外にも、相談員、リサイクル業者、まちづくりプランナーなど現場で働く人も加わり、多様な社会との出会いの場ともなっている。参加メンバーが自ら講師をつめることもあり、自分を表現し、自らネットワークを開拓する動きも見られるようになった（〔その他〕の⑤）。

このように、多様なネットワーキングを生

み出すロールとして「楽塾」という場がり、ツールとして毎週開かれるワークショップ型学習会が設定されている。それら楽塾の学び直しや地域生活のトレーニングといったルールを皆が共有することで、支援・被支援の上下関係でない、自然体のネットワークを広げている。これら実践は、地域活動レベルで、実に柔軟な社会的包摂を生み出すしくみを形成できたひとつのモデルと言えよう。今後は、社会関係資本としてのつながりをいかにストックし、活用していくことができるか、そのシステムの構築が課題となっている。

(4)中山間・被差別部落でのｺﾐｭﾆﾃｨ再構築

和歌山県新宮市(新宮・熊野川)における、地域福祉的な課題に向けた取り組みを中心に、地域内外の連携や交流などの、コミュニティの再構築を行なってきた。特に、デジタルメディアとしてのE-learningを導入することで、広域に及ぶ地方における柔軟なコミュニティ形成のあり方を模索した。

中山間地域においては、市町村合併なども伴い過疎化・高齢化が急速に進んでいる。また交通インフラも縮小傾向にあり、地域の支え合いが不可欠な状況である。そこで、Iターン、Uターンなどの比較的若者が中心の外部からの移住者が、地域福祉的な接点を持つ契機として、各集落の地域資源データベースを活用する取り組みを展開しつつある。地域資源データベースは、福祉的な施設をはじめ、アクセシビリティ、まつりやイベントなどの地域文化などを映像と聞き取りを中心に「見える化」することで、外部の人間が見ても地域を知りえるソースとして整備されつつある。

また、被差別部落では、主に隣保館を中心とした福祉的な取り組みの聞き取りを行ってきた。対象も子どもから高齢者まで幅広く、教育・生活・日常的な見守りから防災支援に至るまで、様々な活動を行っている。この多様な活動は、コミュニティ内外のアクティビティ（キーパーソン）の連携により成り立っており、そのネットワーク図や、活動内容を整理し、「見える化」することで、地域活動の再評価と次世代への継承ツールとして活用を進めている。

(5)郊外での持続可能な「多文化共生」の追求

1990年代後半以降、郊外の団地への日系ブラジル人の集住が目立っている。リーマンショック後、彼らの置かれた不安定な社会経済的状況が問題となったが、しかし郊外団地の多くは、その開発の経緯から、加速度的な高齢化が進展するなど、地域でのコミュニティ維持が困難になる状況が生じている。

既存研究では「ニューカマー」コミュニティの内部にのみ関心が偏在し、「多文化共生」のもう一方の主体であるホスト側住民に焦点が当てられてこなかった。そこで、各々の率直な意見を看取し、「共生」のための基盤作りをするためのアンケート調査を行った（〔学会発表〕の②）。

アンケートから明らかになった点として、日本人の側は長らく同質的なコミュニティを形成してきたが故に、高齢化の現状に懸念を示しつつも変化に対する抵抗が根強い点、ブラジル人の側は将来的な定着を意識して日本人との交流促進を期待しているものの、不安定な就業形態・就労形態（昼夜の交替制勤務）のために有効な手段を取れない点、が挙げられる。2012年度以降は、これらの結果をふまえ、両者のメディエーターとなる人材発掘や、持続可能なコミュニティ維持のモデル呈示を目指す計画を持っている。

(6)社会的包摂に向けた諸アクターの動態的連関関係の生成に関する研究：豪・メルボルン

オーストラリアは世界でも有数の移民受け入れ国であり、多文化社会というコンテクストにおける社会包摂のあり方を探ることは、日本における同種の社会包摂／排除の現状を相対化することにもつながる。

本研究では、豪・メルボルンを事例に、関係各所からの聞き取り調査を通じてその意義・効用を検討した。その結果、母子世帯や高齢者福祉や若年層サポートといった個人への支援体制に加え、教育やアートに代表される、コミュニティと文化のダイナミックな関係を構築しようとする活動など、コミュニティレベルで行われているサポートやケアの詳細が明らかになった。また、個人とコミュニティとの繋がりを維持することの困難さや、コミュニティ活動同士のヨコの連携、自治体や政府とのタテの連携における課題も明らかとなった。また、諸アクターのリーダーシップと地域ガバナンスとの効果的な相互関係の構築において、定期的に委員会を設けて情報共有するなど、大学等の研究者集団が重要な役割を果たしてことも明らかになった。本調査の成果は2012年の全米地理学者協会年次大会において発表し（〔学会発表〕の①）、報告書としての公表を予定している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①福本　拓、市民活動データベース化の意義と課題―東大阪市の『合田文書』を事例に―、『世界人権問題研究センター紀要』、査読無（採録決定）

②KUMAGAI Mika, A Comparative Analysis of Changes in the Characteristics of Urban

Residents in Tokyo and Osaka, 1995-2005, *UrbanScope*, 査読有（採録決定）
③福本　拓、「密航」に見る在日朝鮮人のポスト植民地性、『アジア遊学』、査読無、145号、2011、pp.56-65
④原口　剛、労働運動による空間の差異化の過程―1960-70年代の「寄せ場」釜ヶ崎における日雇労働運動を事例として、『人文地理』、査読有、63巻4号、2011年、pp.324-343
⑤原口　剛、対話から地図を生み出す―地理学的アプローチによる文化創造の実践」、『人文地理』、査読無、63巻2号、2011年、p.184
⑥福本　拓、東京および大阪における在日外国人の空間的セグリゲーションの変化―「オールドカマー」と「ニューカマー」間の差異に着目して―、『地理学評論』、査読有、83巻3号、2010、pp.288-313

〔学会発表〕（計７件）
①KUMAGAI, M. and FUKUMOTO, T.、 Practical Ways of Social Inclusion in the Multicultural Society: Practices of the Social Inclusion in the Western Region of Melbourne, Australia, *The Association of American Geographers 108th Annual Meeting*, Sheraton New York Hotel & Towers, NY, USA, 2012年2月25日
②福本　拓・藤本久司・江成　幸・長尾直洋、「『多文化共生』に関するホスト側住民の意識の違い―三重県四日市市の日系ブラジル人集住地区を事例に」2011年度人文地理学会大会、於：立教大学、2011年11月13日
③共在の場を考える研究会（稲津秀樹・本岡拓哉・中西雄二・野上恵美・山本晃輔・芝野淳一）「まちかどの記憶とその記録へ―共在の場としての〈ながた〉を歩く―」カルチュラル・タイフーン2011、於・海外移住と文化の交流センター、2011年7月24日
④福本　拓：「『密航』が繋ぐもの－戦後大阪在日朝鮮人史の一側面」シンポジウム『2010年、いま戦後引き揚げを問う』、於：九州大学、2010年9月18日
⑤若松　司、「西成区における健康と生活の相関について」2009年度人文地理学会大会、於：名古屋大学、2009年11月8日
⑥福本　拓・熊谷美香、「大阪市における集合住宅の建設による居住地域構造の変化―民間・公的セクター別にみた分析」2009年度日本地理学会秋期学術大会、於：琉球大学、2009年10月25日
⑦福本　拓、「日朝間の『密航』をめぐる経験―排除の客体か、変革の主体か？」シンポジウム『日本帝国崩壊と人口移動・引揚げ、送還そして残留』、於：北海道開拓記念館、2009年8月23日

〔図書〕（計１件）
①原口　剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編著『釜ヶ崎のススメ』洛北出版、2011年、390頁。

〔その他〕
ホームページ等
①http://www.itacos.jp/
（「人縁生成のための対話支援型「口承」・「地霊」創作システム」）
報告書
②共在の場を考える研究会（稲津秀樹・本岡拓哉・野上恵美・中西雄二）編『まちかどの記憶とその記録のために―神戸　長田から／へ』同発行、2012年、103頁。
③藤井幸之助・本岡拓哉編『「龍王宮」の記憶を記録するために―済州島出身女性たちの祈りの場』こりあんコミュニティ研究会、2011年、144頁。
④「レリジョンカフェ」報告書編集委員会／阿倍野プラザ編『阿倍野レリジョンカフェ第１集』大阪市立大学都市研究プラザ、2011年、116頁。
⑤「楽塾」編集委員会・西成プラザ編『「楽塾」報告書　‘10』大阪市立大学都市研究プラザ、2011年、200頁。
⑥広島韓国・朝鮮社会研究会『戦後広島のマイノリティの立ち退き関係新聞記事資料集』同発行、2010年、1068頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
若松　司（WAKAMATU TSUKASA）
大阪市立大学・都市研究プラザ・研究員
研究者番号：１０５１４８８８
(2)研究分担者
福本　拓　（FUKUMOTO TAKU）
大阪市立大学・都市研究プラザ・研究員
研究者番号：５０４５６８１０
熊谷　美香（KUMAGAI MIKA）
大阪市立大学・都市研究プラザ・研究員
研究者番号：６０５２７７７９
原口　剛（HARAGUCHI TAKESHI）
大阪市立大学・都市研究プラザ・研究員
研究者番号：４０４６４５９９
（H23～　研究分担者）
白波瀬　達也（SHIRAHASE TATSUYA）
大阪市立大学・都市研究プラザ・研究員
研究者番号：４０６１２９２４
（H23～　研究分担者）
本岡　拓哉（MOTOOKA TAKUYA）
同志社大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：６０５１４８６７
（H23～　研究分担者）
(3)連携研究者
なし